

住田和子編『エレン・スワロウ・リチャーズ著作集：
Collected Works of Ellen H. Swallow Richards』
 に寄せて
 - 日本社会政策史研究への示唆 -

杉 田 菜 穂

I はじめに

Ellen H. Richards (1842-1911；以下、リチャーズ)は、優境学 (Euthenics) の提唱者として知られている。住田和子氏によって編まれた *Collected Works of Ellen H. Swallow Richards* (Edition Synapse, 2007；以下、リチャーズ著作集)は、彼女が遺した著作の復刻集成版である。

リチャーズはマサチューセッツ工科大学最初の女子学生であり、「アメリカ公衆衛生学の母」あるいは「家政学の母」と称される。優境学は彼女の研究人生の到達点であり、優生学に対抗する概念としてのそれは遺伝に対して環境 (改善) の重要性を強調するものであった。その優境学は、日本も含む諸外国にも普及して生活にかかわる社会政策や社会運動を理念的に支えることになる。

本著作集によって明らかになる総体としてのリチャーズの功績は、環境というテーマについて人間社会をも含む視野から取り組んだことに認められる。それはまさに、今日の学術的な動向におけるひとつの流行ともいえるべき学際研究である。行論の都合上ここでの内容紹介は *Euthenics, the Science of Controllable Environment: A Plea for Better Living Conditions as a First Step toward Higher Human Efficiency* に限定するが、それも含む著作集の全体構成を示すところからはじめよう。

リチャーズ著作集は6冊 (全5巻+別冊) から成り、別冊 (住田氏による「解説」) を除く第1巻から第5巻には単著13作と編著4作、個別論考6編が収められている。¹ それは具体的に、以下の通りである。

1 別冊の「解説」には、住田氏によるすべての資料に対する短評が収められている。読者はそれに目を通すことで、本著作集の全体像をつかむことができる。

第1巻

- ・ *First Lessons in Minerals*, Boston: Press of Rockwell and Churchill, 1882, 32 pp. [1st ed. 1880]
- ・ *The Chemistry of Cooking and Cleaning*, Boston: Whitcomb and Barrows, 1897, 166 pp. [1st ed. 1882]
- ・ *Food Materials and their Adulterations*, Boston: Estes and Lauriat, 1886, 183 pp.
- ・ *Home Sanitation: a Manual for Housekeepers*, Boston: Ticknor and Co., 1887, 80 pp. [共編著]
- ・ “The Relation of College Women to Progress in Domestic Science”, PACA Series II, No.27, 1890, 10 pp. [雑誌論文]
- ・ “Domestic Science, What it is and How to Study it at Home”, *The Outlook*, Vol. 55, No. 17, April 27, 1897, 3 pp. [雑誌論文]

第2巻

- ・ *The Cost of Living as Modified by Sanitary Science*, 2nd enlarged ed., New York: John Wiley & Sons, 1901, 133 pp. [1st ed. 1899]
- ・ *Plain Words about Food: the Rumford Kitchen Leaflets*, Boston: Press of Rockwell and Churchill, 1899, 186 pp. [編著]
- ・ *Air, Water, and Food: From a Sanitary Standpoint*, New York: John Wiley & Sons, 1900, 226 pp. [共編著]

第3巻

- ・ *The Cost of Food: a Study in Dietaries*, 3rd ed., New York: John Wiley & Sons, 1917, 160 pp. [1st ed. 1901]
- ・ *The Dietary Computer*, New York: John Wiley & Sons, 1902, 54pp.
- ・ *The Art of Right Living*, Boston: Whitcomb and Barrows, 1904, 50pp.
- ・ *The First Lessons in Food and Diet*, Boston: Whitcomb and Barrows, 1904, 56pp.
- ・ “Ten Years of The Lake Placid Conference on Home Economics; Its History and Aim”, *Tenth Lake Placid Conference on Home Economics*, 1908, 7pp.

第4巻

- ・ *The Cost of Shelter*, New York: John Wiley & Sons, 1905, 142 pp.
- ・ *Sanitation in Daily Life*, Boston: Whitcomb & Barrows, 1907, 93 pp.
- ・ *Laboratory Notes on Industrial Water Analysis; a Survey Course for Engineers*, New York: John Wiley & Sons, 1908, 52 pp.
- ・ *The Cost of Cleanness*, New York: John Wiley & Sons, 1908, 114 pp.

・“Influence of Industrial Arts and Science upon Rural and City Home Life”, National Education Association, [Manual Training Department], 1909, 4 pp.

第5巻

・ *Euthenics, the Science of Controllable Environment: a Plea for Better Living Conditions as a First Step toward Higher Human Efficiency*, 2nd enlarged ed., Boston: Whitcomb & Barrows, 1912, 182 pp. [1st ed. 1910]

・ *Conservation by Sanitation: Air and Water Supply Disposal of Waste*, New York: John Wiley & Sons, 1911, 317 pp.

・“The Elevation of Applied Science to an Equal Rank with the So-Called Learned Professions”, *Technology and Industrial Efficiency*, McGraw-Hill, 1911, 6 pp. [論文集からの抜粋]

・“Social Significance of Home Economics Movement”, *The Journal of Home Economics*, April 1911, 9 pp. [雑誌論文]

(以上、計23冊)

23のタイトルからその内容が窺えるように、これらの著作を通じてリチャーズが主張しているのは居・食・住にかかわる応用科学としての衛生科学 (Sanitary Science)、家庭科学 (Home Economics; Home Sanitation; Domestic Science) 及びその知識を普及するための教育の重要性である。それをひとつの学問として体系化しようと試みたのが、彼女の生前最後の著作となった *Euthenics, the Science of Controllable Environment: A Plea for Better Living Conditions as a First Step toward Higher Human Efficiency* (本集、第5巻所収; 以下、『優境学』) である。

次節では、当書で提唱された「優境学」の概念を明らかにしよう。²

II リチャーズの『優境学』

リチャーズによる優境学の定義は、「有能な人間を確保するという目的のため、意識的な努力を通じて生活環境を改善すること」である。それは当時の時代思潮であった優生学に対立する概念として提起された。リチャーズは言う。「優生学

2 「優境学」は本書によって体系的に論じられるが、住田氏（「解説」）によれば、この言葉がリチャーズによって用いられたのは遡って1904年の学会である。

は遺伝を通して人類の改良を行う。優境学は環境を通して人類の改良を行う。優生学は未来の世代のための衛生学である。優境学は現代の世代のための衛生学である。優生学は注意深い調査を待たなければならない。優境学は時宜を得ている」と。優境学は「衛生科学」「教育」「科学と教育を生活に結び付けること」を通じて推進されるべきで、衛生科学によって健康と病気の予防に役立つ法則が導き出され、教育によってそれが知識として伝えられる。そしてそれを日常生活に応用するというプロセスである。

リチャーズによれば、正しい生活は新鮮な食べ物と安全な水のある環境で生活できること、清潔で病気を引き起こすことのない環境、快適な場としての住み処、労働と休息と余暇の調和によって実現する。先取りして序の内容に言及してしまっただが、本書『優境学』の構成（目次）は以下の通りである。

序

- I. The opportunity for betterment is real and practical, not merely academic.
- II. Individual effort is needed to improve individual conditions. Home and habits of living, eating, etc. Good habits pay in economy of time and force.
- III. Community effort is needed to make better conditions for all, in streets and public places, for water and milk supply, hospitals, markets, housing problems, etc. Restraint for the sake of neighbors.
- IV. Interchangeableness of these two forms of progressive effort. First one, then the other ahead.
- V. The child to be "raised" as he should be. Restraint for his good. Teaching good habits the chief duty of the family.
- VI. The child to be educated in the light of sanitary science for girls. Applied science. The duty of the higher education. Research needed.
- VII. Stimulative education for adults. Books, newspapers, lectures, working models, museums, moving pictures.
- VIII. Both child and adult to be protected from their own ignorance. Educative value of law and of fines for disobedience. Compulsory sanitation by municipal, state, and federal regulations. Instructive inspection.
- IX. There is responsibility as well as opportunity. The housewife an important factor and an economic force in improving the national health and increasing the national wealth.

(文法的に不正確な個所も原文通りとした。)

I～IXは各論的な内容である。Iでは、生活習慣と疾病構造の関係について論じられる。リチャーズによれば、1882年以来肺結核や腸チフスといった伝染病の罹患率は大幅に減少したものの、心臓疾患をはじめとする個々人の不適切な生活習慣に由来する病気の罹患率は増加している。その対策として生物学的教訓(生活環境についての科学的知識)を広めるのは、市民の健康と幸福の増進に繋がる生活習慣を身につける機会になるという。

IIでは、環境と人間の能力との関係について論じられる。「環境は人間の性格、ものの見方、健康に対してどこまで責任があるのか、あるいは人間は環境因子のうち何を統御できるのか」という問いをめぐって、ある法則についてそれが日常生活に応用できることを示すのは専門家の役割であるが、それを取り入れる個人もそれが自分に影響を及ぼすこと、したがって自分が周囲の環境に注意を払わなければならないことを自覚しなければならないとしている。

IIIでは、生物学的進化の本当の意義について論じられる。リチャーズによれば、それは人間もまた侵すことのできない法則に貫かれた有機的な自然の一部であるということである。したがって、何らかの疾病は人間が自然法則の何かを侵した結果である。それが何であるかを特定するのは専門家の仕事であるが、衛生状態の管理についてはある程度まで地域社会とそのルールに委ねざるを得ないという。

IVでは、個人と社会の関わりについて論じられる。社会の発達は一進一退に進む。個人が社会の前を進んでいたかと思うと、ある時は社会が個人を追い越す。社会は個人より格段に抜き進めることはできず、個人は社会のルールに牽引されて、あるいは先見性のある個人の先導によって前進するとしている。

Vでは、児童家庭において重要なことについて論じられる。それは、悪い習慣、悪い食べ物、悪い空気、不潔、虐待といった子どもの発育の妨げになるものから子どもを遠ざけることである。それと併せて重要なのが正しい姿勢、清潔な作法、不潔に対する嫌悪感、大人になった時に有能な働き手となるのに役立つ習慣といった、よい習慣を身につけさせることであるという。

VIでは、家庭教育と学校教育の関係を論じている。それらは互いに呼応しあうことが求められ、具体的には家庭は体験を得る場であり、学校はそれに光を当てて結晶化するための知識を得る場であるとしている。基本的な生活習慣は人生の初期に家庭で躰けられるべきだが、それがかなわないまま学校へ入ってくるならば、学校がそれを引き受けなければならないという。

VIIでは、教育拡張運動の意義を論じる。大学や学校教育が多忙な労働者にも利用されるようになり、かつては教育ある者のためにのみあった文化的な施設が総ての人の教育を引き受けようになったこと、特殊技能や科学の学校もまた、講

義、定期刊行物、案内所、特別展示などを通じて一般の人々にも積極的に学びの機会を提供するようになったことに大きな意義を見出している。

Ⅷでは、生活環境の管理をめぐる行政について論じられる。行政は、公共の福祉に目を配るために特別に選ばれた人によって担われるが、個人的な行為はその委任された権力によって制限されることになる。行政の一部門として環境を管理するということは民主主義においては比較的新しい思想であり、そこでは個人の権利を多少なりとも公共の福祉のために放棄しなければならないという。

Ⅸでは、家庭生活の管理について論じられる。住まいの管理、洗濯、掃除、料理といった日常生活への気配りには家族の福祉という目的があり、そこに生活管理に関する様々な技術の重要な意味を見出すことができる。家庭科学を大学教育に導入することを求める家政学運動は、家族や子どもたちの福祉の向上を図ることに繋がり、家庭とは本来有能な男女の養成の場であるということに立ちかえることになる」と述べている。

リチャーズは本書を通じて、何より生活管理の重要性を主張している。そのような観点から提唱された（優生学と対立する概念としての）優境学は、環境統御の科学として位置づけられる。リチャーズのいう生活環境は大きく分けて自然環境と対置し得る社会環境と家庭環境があり、その向上に寄与する教育の重要性が指摘された。住田氏が「解説」で言及しているように、本書では「ユーセニクスの実体とその基礎についての概説」「ユーセニクスの市民（子どもから大人まで）への普及方法」について論じられるとともに「ユーセニクスの普及における女性の役割・責任」の重要性を意識させる記述が含まれている。

以上のことを踏まえて、次節ではリチャーズの優境学（ユーセニクス）と日本の関連について、評者の専攻する社会政策の視点から論及してみたい。それは、住田氏が以下のように指摘するエコロジー運動とはまた異なる側面からリチャーズの功績を問う作業である。

「リチャーズが生きていた頃、太平洋を隔てた日本にも、エコロジー運動の先駆者田中正造（1841-1913）がいた。正造は『真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず人を殺さざるべし』（『田中正造全集・第13巻』）と、真の文明の在り方をエコロジカルに問い続け、近代日本で最初の大規模公害に対する反対運動に生涯を捧げた。共に『水』から生涯の仕事に入ったりチャーズと正造、両者の置かれていた状況の違いはあったが、常に自然や環境との関わりで、民衆のレベルから文明の在り方を問うたエコロジカルな生涯は、ルーツを同じくしていると感じないではいられない。因に、正造に続いて、日本

では神社合祀令反対運動の南方熊楠（1867-1941）がいる。」³

Ⅲ 日本社会政策史研究への示唆

「優境」概念の日本的起源。興味深いことにそれは、(リチャーズが優生学に対立する概念として提唱したのに対して) 優生論者によって「優生学の解釈変更」[(生命の質から) 生活の質の発見] という形でもたらされた。

具体的に、日本で優境思想が普及をみるのは1920年代のことである。例えば『日本人種改造論』(1910年)で知られる海野幸徳(うんの・ゆきのり; 1879-1955)は、1922年に発表した論考「優生学と社会事業」のなかで優境概念に言及している。それは、優生学と社会事業の関係を論じるとともに社会改良策として社会事業を位置づけるものである。

そのなかで海野は、一般に考えられる様々な境遇に対処する社会事業を「境遇による社会事業」とすれば、他に「遺伝による社会事業」があるという論を展開した。優生学は一般に優境学の対象とされる境遇をも対象とするものであり、優生学は優生と優境という二つの概念を同時に包含するものであるという立場をとったのである。それはさらに、優生学的社会政策の主張へと展開し、社会の荒廃は、労働問題、婦人問題、優生問題という個々の社会問題に対して分断的見地から解決を促そうとしていることに由来するとした。こう考えた海野は、1924年に刊行された『輓近の社会事業』のなかで「境遇による社会事業」と「遺伝による社会事業」の統合による優生学的社会政策の実現を唱えるに至る。

それに対して、社会運動家として優境学も含むものとしての優生学の普及に努めたのが池田林儀(いけだ・しげのり; 1892-1966)である。ジャーナリストから社会運動家に転じた池田は、1926年に「日本優生運動協会」を設立して独自の生活改善運動を展開した。「人口問題も、労働問題も、婦人問題も、職業問題も、その他あらゆる社会問題解決の先決条件として、日本民族は、優生学的に覚醒して、この社会を、素質のよき同胞を以て構成し、諸多の問題を解決せしめんとする努力をなさんとするものであります」とする池田は、本運動によって家庭生活管理の重要性を浮かび上がらせた。

戦前に普及をみた優境概念は、ここに例として取り上げた海野や池田にみられるように社会問題としての人口問題への関心を生活問題へと広げることにつな

3 住田和子「解説」『復刻集成 エレン・スワロウ・リチャーズ著作集 *Collected Works of Ellen H. Swallow Richards* 別冊解説』(Tokyo: Edition Synapse, 2007), 10-11.

がった。ここに、社会生活を対象とする社会政策と家庭生活を対象とする家政学の接点、あるいは社会政策における優境概念の意義を見出すことができるが、この動きは長くは続かなかつた。1930年代を経て戦後に確立をみる日本の家政学は女子教育と結び付けて扱われていくことになる。社会政策についても、社会政策＝労働政策という把握をした大河内理論が強い影響力をもち、生活管理の学としての家政学、社会政策の生活政策的な系譜は見えにくくなってしまった。

そうしたなかで、戦後間もない時期に研究者として歩みはじめた松下英夫（まつした・ひでお；1923-2006）は、リチャーズの議論に注目するとともに生活管理の学として家政学を確立することを志した人物である。松下の議論はドイツの経営学や経済学、アメリカの家政学の系譜を背景に家庭生活と社会的制度の関係性を体系化しようと試みるユニークなものであり、『新家政学原論』（1968年）や『ホーム・エコノミックス思想の生成と発展』（1976年）として発表されている。

「わが国におけるホーム・エコノミックス研究は、近年、ようやく長かった雑学的技芸論の冬眠時代よりめざまし、ことに最近における『生活科学論議』を契機として、その本質が活発になりつつあることはのぞましい傾向である。

しかし、まだその論議の焦点は、少数の研究者をのぞいてほとんど共通の問題意識からの発言ではなく、閉鎖的な主観的発想が多く、また数少ない著作におけるその歴史的考察もたんに文献資料の所在を模索するにとどまり、その生成・発展の母胎である古典的業績についての吟味はもとより、その学説の成立の基礎となるべき歴史的・社会的因果関係にまで追究し、十分に検討する段階に達していないといつてよい。

すなわち、いまや、われわれは、ホーム・エコノミックスの思想史あるいは学説史的研究を緊要とする段階に直面しているのである。」⁴

このように述べる松下の家政学定義は、当時の日本における家政学を専門とする他の論者と比べて異色のものであった。

「従来、家政学の定義としてそのほとんどがその目的に『家庭生活の幸福』あるいは『家庭生活の向上』ということあげているが、この目的自身は誤りではないとしても、家庭生活の『幸福の増進』あるいは『向上、進歩』という定義づけは、他の科学、例えば医学にしる、経済学にしる、法律学にしる

4 松下英夫『ホーム・エコノミックス思想の生成と発展』（同文書院、1976）、3。

ろ、その他すべての科学にもいえることであって、これをもって家政学の根本的な本質と見ることはできない。…(中略)『家政学とは有限な人生における家族の生活周期に従って、生命の再生産のための家庭における生活力の循環にもとづく生活の営みを対象とする科学である』となるだろう。」⁵

家庭を生命再生産の場としてみることで、社会生活との関わりも含めた家庭生活が家政学の対象となっているのである。それは1990年代以降の少子化問題を背景とする家族政策の動向を想起させるが、松下は家政学の起源まで遡ってリチャーズの功績を評価するとともに、その影響を受けていた。優生学との対比を意識した優境学としての家政学=生活管理の学を志したのである。

「Euthenicsの思想史的特質は、優生学の遺伝的種族改良に対して、後天的な現在の人間環境による種族改良をめざしているので、その対象領域を有限な個人の能力にとどめず、共同社会との協同による実践を通じた健康と福祉の改善を企図していることである。」⁶

あくまで家政学のなかで松下がこう解説する優境概念は、生活問題への政策的対応という意味を含む点において社会政策の起源とも大いに接点をもつ。

松下は、リチャーズの『ユーセニクス——制御可能な環境の科学——』を取り上げた1972年の論考で、その問題点を以下のように指摘する。少し長くなるが、重要なので引用しておこう。

「Richards, E. H. の“Euthenics”における弱点は、これら(個人的な生活環境と社会的な生活環境——引用者)の区分が『優生学』との対比においてのみ示されているため、『優境学』自身における目的対象は…(中略)個人を中心として、家庭、共同社会(州、国家)に拡大する同心円的理解にとどまり、…(中略)…このままでは、この両者を結合し、日々循環するエネルギーの動的な再生産過程が解明されず、意思主体は、不明確とならざるをえないのである。なぜなら、このような同心円的区分のみでは『家庭生活環境』と『社会生活環境』の二つの生活空間を貫く『人間エネルギー』は、物

5 松下英夫『新家政学原論』(家政教育社、1968)、149-151.

6 松下、前掲書(1976)、16.

理的または生理的意味においてのみ理解されるにとどまり管理的意味における機能的なエネルギー（たとえば種族保存のための『生命力』、自己維持のための『生活力』）の相互循環過程を通じてのみ認識される生活時間の科学的本質はひき出し得ないからである。

すなわち、…（中略）…これらのエネルギーは、家庭を通じて『生活力』として社会に投下されて、そこで、現在の生活資料の再生産を行い、再び家庭にもどり、『生命力』として再生産されて家族員の分労と合労にもとづく将来の生命個体の再生産に向かい、再び家庭を通じて『生活力』として社会に投下されるという循環的構造をもっているのである。

このため『家庭』は、たんなる物理的空間ではなく、人間エネルギーの槓杆点として社会組織と家族を結合する『生活空間』を形成し、またそれゆえにこそ、生活時間の周期性の基点として設定されうるのである。

さらにまた、“Euthenics”そのものの体系内容の焦点が不明確であり、研究対象も衛生科学（公衆衛生学）的分類が主となり、『環境管理』における機能的な管理内容が明示されず、概して家庭外の環境問題の指摘にとどまっている。

それゆえ、他の隣接諸科学との関係（とくにホーム・エコノミックス）との接点の説明は、この学問の性格上 interdisciplinary approach（学際的アプローチ——引用者）をとるとしても、不十分といわざるをえないのである。…（中略）…

したがって、この両者（ホーム・エコノミックスと Euthenics——引用者）は具体的な個々の人間主体から出発して体系化される点においては同じであるが、ホーム・エコノミックスは、主として『家庭』を中核とする家族関係を通じた将来の種族保存と自己維持を目的とするのに対し、Euthenics は家庭というよりはむしろ、社会資本、国家資本をも含めた『社会組織』に焦点をおいた生活環境における現在の自己維持（自己改善）を目的とするといえよう。⁷

この主張は、家庭生活の管理を問題とする家政学と主に社会生活を問題とする社会政策（この場合、生活政策）がその起源において密接に結びついていることを示している。それが異端な説として扱われてきた背景には、戦後の家政学が女

7 松下英夫「E. H. Richards の *Euthenics-the science of controllable environment* について—生活経営思想史における優境学の特質と課題—」『東海大学紀要 教養学部』3 (1972): 1-15. 引用は、松下、前掲書 (1976), 198-203.

子教育と関連付けられることで家庭生活にその対象が限定され、他方では社会政策＝労働政策という把握が支配的となることで生活政策への配慮に欠けてきたという生活問題への対処をめぐる日本の特質が横たわっている。

IV むすびにかえて

福祉国家（Welfare state）とは、完全雇用と社会保障政策によって全国民の最低生活の保障と物的福祉の増大とを図ることを目的とした国家体制である。社会保障政策に関していえば、それが市民権を得たのは『ベヴァリッジ報告』（1942年；イギリス福祉国家の青写真）であるが、その存立を支えている生存権思想の歴史はさらに遡る。「出産権か生存権か」といった問いをもたらした貧困や少子化をめぐる議論は、人口の質の向上を問題とする「人口問題と社会政策」の系譜として把握することができる。

19世紀終わりから20世紀はじめに出生率の低下を経験した西欧先進諸国では、少子化への政策的対応が大きな課題となった。家族政策（Family Policy）の提唱者とされるミュルダール夫妻は、1930年代当時のスウェーデンが直面していた出生率の低下を「人口問題の危機」と表現し、予防的社会政策を構想した。それは、児童家庭を重視することで人口の質の向上に重きを置く社会政策を意味する。

それに対して、日本で出生率の低下が行政課題となったのは1990年代以降のことである。以来、「仕事と家庭の両立」「ワーク・ライフ・バランス」といった言葉にも象徴されるように家庭外の生活と家政主体の生活の有機的な結び付きに目を向けざるを得なくなっている。そうした時代の流れにも松下の家政学本質論研究の意義を見出すことができ、その松下が目指したのがまさにリチャーズの思想であった。

松下の議論は、社会政策学と家政学の接点を、また社会政策論における優境概念のもつ意味を史的に把握し直す契機をも提供してくれる。それらは、社会政策の生活政策的な系譜をめぐる問いであり、社会政策の概念規定とも深く関わってくる。というのも、少子化時代に至るまでの日本では人口の質をめぐる議論は貧困問題と結びつけられがちで、児童や女性を対象とする政策も要支援児童や貧困低所得者、母子家庭といった特定の対象に絞った福祉サービスの枠組みで把握されてきた。それは、家族政策ではなく児童福祉や母子福祉、家族福祉と呼ばれてきたものである。

それに対して、松下が到達した家政学は「生命の再生産（種族保存と自己維持を含む）のための家庭を中心とする生活力の循環にもとづく生活の営み」を対象

とする科学である。この観点は、その根底において海野幸徳や優生運動を展開した池田林儀といった戦前期に優境概念を取り入れた専門家の議論と結び付いており、戦前から戦後への人口の質、生活の質をめぐる議論の系譜上に把握できるのである。

松下が研究者への途を歩み出したのは、ちょうど近代家族モデルを標準家族と呼び、夫（男性）が労働市場で賃金労働に、妻（女性）は家庭において家事労働に専念するというモデルが日本に定着した時期である。それはまた、中村常次郎とともに松下の師である大河内一男の社会政策論（社会政策＝労働政策と規定）の影響力が大きかった時期でもあった。⁸ これらのことは、松下の議論が家政学界内だけにとどまることを運命づけてしまったといえよう。

以上で述べてきたことはあくまで社会政策を専攻する評者の研究関心からのものであるが、リチャーズ著作集は living（生活、生存）をめぐる問いを様々な視点から追究する上で大変有益な研究資料である。優境学をめぐる問いこそは、ここに提示した社会政策史をはじめ科学史、教育史等の生活に関わるあらゆる学問分野を有機的に結び付ける可能性をも秘めており、著作集というかたちでリチャーズの功績をまとめられた住田氏の功績に深い敬意を表したい。

参考文献

- ・松下英夫『新家政学原論』（家政教育社、1968）。
- ・松下英夫『ホーム・エコノミックス思想の生成と発展』（同文書院、1976）。
- ・松下英夫「家政学本質論研究の回顧と発展への要望」『日本家政学会誌』45, no. 11 (1994): 1071-1074.
- ・玉井金五『防貧の創造——近代社会政策論研究——』（啓文社、1992）。
- ・杉田菜穂『人口・家族・生命と社会政策——日本の経験——』（法律文化社、2010）。

8 松下（1994）によれば、家政学及び生活経営理論構築の基盤は東京大学経済学部、経済学研究所に形成された。大河内からは「労働力の再生産」という視点から「国民経済学」と「家計（家政学）」の関係を、中村からは家政を根源経営とする H. ニックリッシュの「組織論」や H. シャックの「経済形態学」の知識を得たとしている。